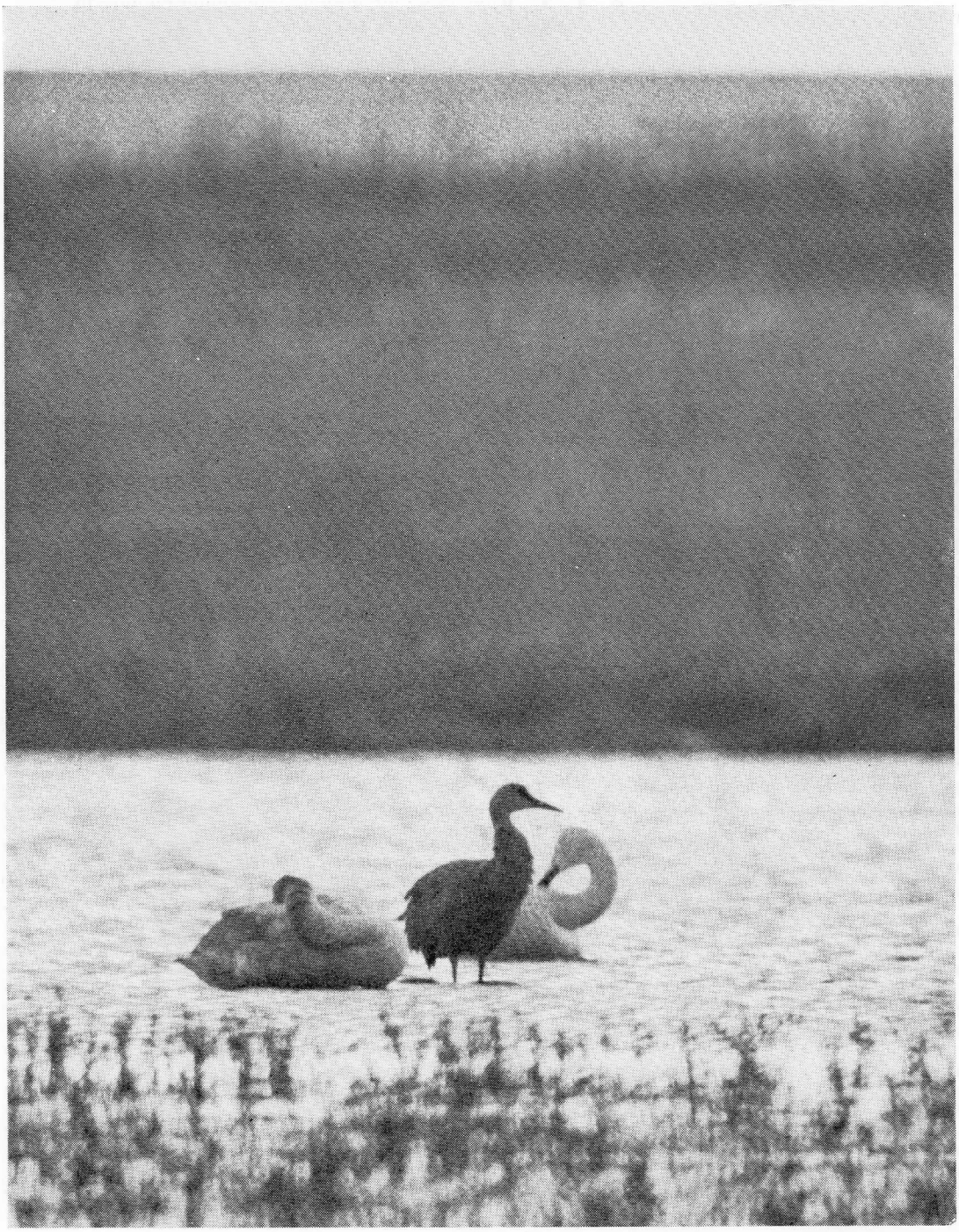
野鳥だより

—北海道—

第３８号
編集・発行　北海道野鳥愛護会
発行年月日　昭和54年12月21日



カナダヅルとオオハクチョウ　ウトナイ湖　昭和54年12月２日　撮影　萩　千賀

もくじ

探鳥地案内……先名征司……2
糠平を中心とする東大雪の鳥……川辺百樹……3
鵡川でオオチドリを観察……羽田恭子……7
えぞ鳥獣夜話……安田鎮雄……8
マナヅル発見……大西重利……9
さえずり……10
阿寒湖畔のオジロワシ・クマゲラ、カナダヅルを確認、函館湾のコクガン
探鳥会報告……鵡川・野幌・ウトナイ……10
探鳥会案内……12
新年懇談会のご案内……12
編集後記……12

探鳥地案内

⑧

― 稚内市森林公園 ―

◆**位置**　稚内市裏山（森林公園）

◆**概況**　稚内市街背後の丘陵地帯でカンバ林が主であるがハンノキ、ナナカマドも見られる。また風衝地でもあるのでチシマザサの風衝草原とトドマツ、カラマツの造林地もある。森林、草原両方の鳥が見られる。

◆**交通**　稚内公園ロープウェー下車後森林公園駐車場まで徒歩10分、この間も探鳥は出来る。

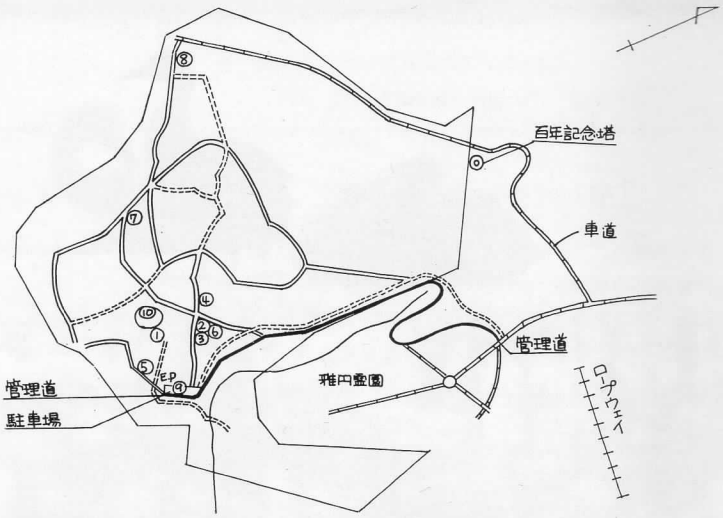
◆**探鳥コース**　ロープウェー終点より森林公園管理道を100 mばかり進むと建物もなくなり探鳥を楽しめる。ただ車の通行があるため平行して通る歩道を歩くとよい。歩道はかなり密に整備されているのでどのコースを通っても良いが、沢筋には大きな木が多く森林性の鳥を楽しむことが出来る。尾根筋には、樹木は少なく草原性の鳥が主であるが、それ程広い地域でもないので混在している。なお、天候が良ければ探鳥と共に海の展望を楽しむことが出来る。

◆**見られる鳥**　ニュウナイスズメ．ムクドリ．コムクドリ．シジュウカラ(多)．ハシブトガラ．ヒバリ．モズ．イカル．ノゴマ(多)．エゾセンニュウ(多)．コヨシキリ．キジバト．コゲラ．アカゲラ．ベニマシコ(多)．ツツドリ．ウグイス(多)．ハクセキレイ．カワラヒワ．コマドリ．ノビタキ．カッコウなど。

なお、横浜在住の日本野鳥の会会員9名が'79．6．21　クマゲラを見たという記録もある。

（先名征司）

〒711　岡山県倉敷市児島小川 1―1―22　環境庁瀬戸内海国立公園管理事務所（執筆当時　在稚内）



糠平を中心とする東大雪の鳥

川　辺　百　樹

私は1973年４月以来糠平に住み、鳥の観察を続けている。先に1973年４月から1974年11月までの観察データをまとめ「大雪山国立公園東部の鳥」[1] として報告した。今回は1974年12月以降1979年８月までの観察で得られた知見を加え報告する。

観察地域とその概要

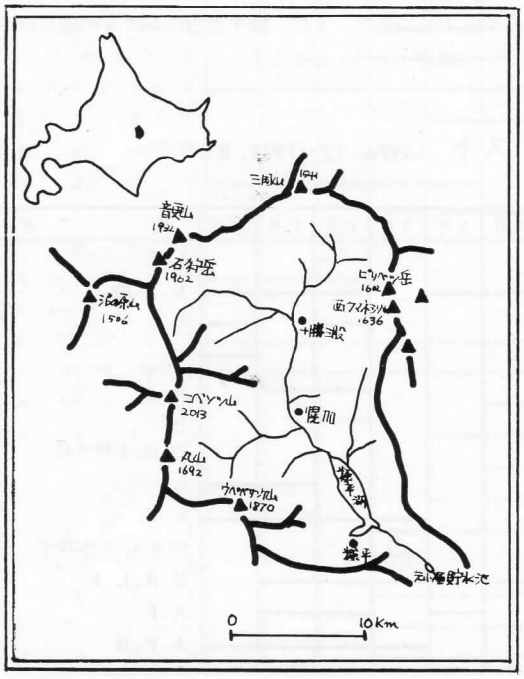
観察地域は大雪山国立公園の東部、ウペペサンケ山、丸山、ニペソツ山、石狩岳、音更山、三国山、ピリベツ岳、西クマネシリ山に囲まれた音更川の流域である（図―１）。

この大部分はエゾマツ、トドマツに広葉樹が混じる針広混交林であるが、標高1,200ｍから1,500ｍくらいにはダケカンバの優占するダケカンバ林が現われ、さらにその上にはハイマツ林が見られる。

この森林の中に、糠平、幌加、十勝三股の集落と発電用につくられた糠平湖、元小屋貯水池が島のように点在する。

糠平での1975年の年平均気温は4.1℃であった。

図―１　観　察　地　域



観察方法

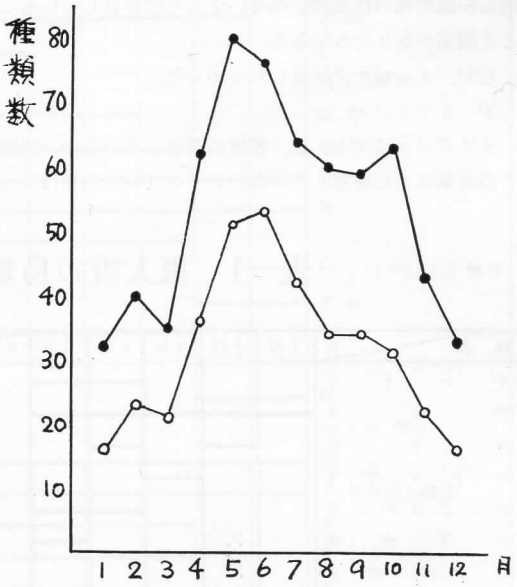
観察は随時おこなったが、とくに1973年と1974年は連日のようにおこなった。ほぼ全域にわたってひととおり観察したが、糠平周辺での観察が多い。また高山帯での観察は前述した山（三国山を除く）で１回以上おこない、合計観察回数は30回程である。

観察結果

1973年４月から1979年８月までの６年５ヶ月の間に記録された種類は34科111種である。（大雪山国立公園ではこれまでにたびたび鳥類調査がおこなわれており[2]、記録された種類は144種にのぼる[3]。）

種類数の周年変化をみると（図―２）、５月と10月にピークが現われるが、このなかからまれな種類を除くと６月がピークとなる。これは５、10月には移動の際に一時的に飛来する種類が見られるためである。

図―２　月別種類数



●―●は出現した全種類数
○―○は主要な種類数

次に、いくつかの種について簡単な説明を加える。

(1)　ガンカモ類

繁殖が確認されたのは、マガモとカワアイサである。

オシドリも可能性があるが確認していない。糠平湖と元小屋貯水池には10月頃から結氷する12月中旬までカモ類が滞在するが、多くはマガモである。なお、オオハクチョウが1971年12月に糠平湖で家族群と思われる6羽が観察された。

(2) ワシタカ類

トビを除くと、ハイタカとノスリがよく見られた。ちなみに1973年4月から1974年3月までに観察した個体数はハイタカ13、ノスリ12、オオタカ5であった。

チゴハヤブサは森林では見られず、高山帯でのみ観察された。

(3) カッコウ、ツツドリ、ジュウイチ

1973年と1974年のこれらの観察個体数はカッコウ121、ツツドリ56、ジュウイチ16であった。これがどの程度生息個体数を反映しているか問題であるが、カッコウは低標高から高山帯近くまで広く出現した。

(4) シマフクロウ

糠平と十勝三股（76年6月の1例だけ）で観察した。糠平では養魚場の魚をねらってよく現われていたが、1978年3月5日を最後にそれ以後観察されていない。

(5) キツツキ類

1973年と1974年の観察頻度はヤマゲラ、コゲラ、クマゲラ、アカゲラ、オオアカゲラの順であった。また出現した最高標高はヤマゲラ800m、その他の種は1,200mくらいまでであった。ヤマゲラが最もよく見られたのは、彼らが低標高の観察機会の多いところに生息していることと関係がありそうである。

なお、ミユビゲラは見られなかった。

(6) イワツバメ

イワツバメはダム、橋、家屋に営巣しているが、岩壁での営巣はまだ観察していない。イワツバメの巣はニュウナイスズメやスズメの巣としても利用され、冬季にはミソサザイがねぐらとして利用したのを見たことがある。

(7) セキレイ類

糠平ではハクセキレイは家屋に営巣し、セグロセキレイは1976年に家屋に営巣したが1979年には川原で営巣した。十勝三股ではセグロセキレイは貯木場の丸太の間に営巣し、ハクセキレイは家屋に営巣している。一方キセキレイは渓流の岩壁に営巣し、人工建築物への営巣はまだ見ていない。

(8) ムシクイ類

センダイムシクイは標高800mくらいまでの広葉樹の多い森林で主に見られ、エゾムシクイは700mくらいから上の針葉樹の多い森林でよく見られた。

メボソムシクイは一時的に見られただけである。

(9) ホオジロとアオジ

ホオジロは糠平、幌加、十勝三股の集落周辺の開地や道路の法面など標高650mくらいまでで見られるのに対し、アオジは林道沿いに森林帯のなかや高山帯近くのダケカンバ林でも見られた。

(10) ギンザンマシコ

冬季森林帯で観察しただけで繁殖期にハイマツ林でまだ見ていない。

(11) ハシボソガラスとハシブトガラス

ハシボソガラスは深い森林のなかで見られず、糠平や十勝三股の集落周辺や音更川に沿った低標高のところで見られた。一方ハシブトガラスは森林帯から高山帯まで見られ、ハシボソガラスよりはるかに多い。

以上概要を述べましたが、東大雪の鳥類リストは表—1のとおりであり、また、糠平周辺における初認記録については表—2のとおりです。

表—1 東大雪の鳥類リスト（1974.12～1979.8）

種名＼月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
オシドリ													L.F
マガモ													L.F.St
コガモ													L
ヒドリガモ													L
キンクロハジロ													L
スズガモ													L
シノリガモ												○	73.12.6 糠平湖
ホオジロガモ													L
カワアイサ													L.F
ミサゴ									○				73.9.4, 9.26糠平
トビ													H.A.L.F
オオタカ													A.F
ハイタカ													A.F.H

種名＼月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
ノスリ													A.F
クマタカ	○							○	○				73.8.19 杉沢74.1.19 糠平 76.1.29 糠平78.9.22 糠平
チゴハヤブサ						○		○					73.6.4 ウペペサンケ山 1700 m 73.8.13 音更山
エゾライチョウ													A.F
コチドリ				○									76.4.18 糠平
イソシギ													L.St.H
ヤマシギ													F
オオジシギ													D
アカエリヒレアシシギ								○					73.8.15 糠平
ユリカモメ										○	○		73.10.13,73.11.12 糠平湖
キジバト													F.D
アオバト													F.H
ジュウイチ													F
カッコウ													F
ツツドリ													F
シマフクロウ													F.H
コノハズク													F
アオバズク													F.H
ヨタカ													D.F
ハリオアマツバメ													
アマツバメ					○								73.6.7不二川林道
ヤマセミ													St.H.L
カワセミ							○						74.7.25 糠平
ヤマゲラ													F.H
クマゲラ													F.H
アカゲラ													F.H
オオアカゲラ													F.H
コゲラ													F.H
ヒバリ													D
ショウドウツバメ						○							74.6.5糠平
イワツバメ													H.A
キセキレイ													St.H
ハクセキレイ													H
セグロセキレイ													H
ビンズイ													F.A
タヒバリ				○						○			74.5.11,74.10.8 糠平
ヒヨドリ													F.H
モズ													D.H
アカモズ					○								77.5.29 十勝三股
キレンジャク													H
ヒレンジャク				○									79.4.24 糠平
カワガラス													St
ミソサザイ													F.H少数が越冬
カヤクグリ													A
コマドリ													F
ノゴマ													A
コルリ													F
ルリビタキ													F
ジョウビタキ				○									74.4.5糠平
ノビタキ													D.H
トラツグミ													F
アカハラ													F.D

種名＼月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
マミチャジナイ									○				74.9.24 ウペペサンケ山1400m
ツグミ													H.F.A
ヤブサメ													F
ウグイス													F.D
エゾセンニュウ													F.D
メボソムシクイ					○	○				○			73.5.29,74.6.5 75.6.12 糠平
エゾムシクイ													F
センダイムシクイ													F
キクイタダキ													F
キビタキ													F
ムギマキ										○			74.10.9 糠平
オオルリ													F
サメビタキ													F
エナガ													F.H
コガラ													F.H
ヒガラ													F.H
ヤマガラ		○		○	○						○		76.5.7,77.11.8 ,77.11.12 78.2.11,78.4.11 糠平
シジュウカラ													F.H
ゴジュウカラ													F.H
キバシリ													F
ホオジロ													D
カシラダカ													D.H
ミヤマホオジロ											○		73.11.21糠平 74.11.14糠平
シマアオジ						○							77.6.5十勝三股
アオジ													F.D.H
クロジ													F
ユキホオジロ	○												74.1.2十勝三股
アトリ													F.H
カワラヒワ													H.F.D.A
マヒワ													F.D.A
ベニヒワ	○	○									○		75.11.12タウシュベツ川 77.1 幌加
ハギマシコ												○	72.12.20糠平 77.12.11糠平
オオマシコ											○		73.10.26糠平スキー場
ギンザンマシコ													F
ベニマシコ													D.H
ウソ													F.A
イカル		○			○								77.5.26 不二川林道 78.2.8黒石平
シメ													F.H
ニュウナイスズメ													H.F
スズメ													H.D
コムクドリ													H
ムクドリ													H.F
カケス													H.F
ホシガラス													A.F
ハシボソガラス													H.F
ハシブトガラス													H.F.A

注◇○は観察頻度の少ないもので備考にデータを記した。

◇とくに冬鳥では年による変動が大きいが、この表では無視している。

◇コサメビタキとハシブトガラが生息している可能性があるが確信がもてないので除いてある。

◇備考欄中Aは高山帯、Fは森林、Stは河川及び渓流、Dは伐開地、Hは集落（糠平、幌加、十勝三股）、Lは糠平湖と元小屋貯水池を表わす。

表—2　糠平周辺における初認記録

種名＼年	1973年	1974年	1975年	1976年	1977年	1978年	1979年
イソシギ	4. 25	4. 28		5. 3	5. 1		
ヤマシギ	5. 8	4. 25	4. 27	4. 25		4. 19	
キジバト	4. 12	4. 18		4. 15			
ジュウイチ	5. 27	5. 31	5. 24			5. 21	
カッコウ	5. 27	5. 21	5. 24	5. 19*	5. 22		
ツツドリ	5. 15	5. 16	5. 22	5. 19*			
イワツバメ	4. 21	4. 22	4. 11	4. 21	4. 14	4. 18	4. 8
キセキレイ	4. 8	4. 5	4. 12	4. 7	4. 8		4. 7
ハクセキレイ	4. 4	4. 2	3. 31	3. 30	3. 30	3. 27	3. 26
モズ	4. 11	4. 17	4. 19	4. 13	4. 14*	4. 13	4. 12
コマドリ	5. 6	5. 2	5. 8	5. 9	5. 4		
コルリ	5. 17	5. 11		5. 17			
ルリビタキ	4. 12	4. 20	4. 21	5. 4	4. 26		4. 21
ノビタキ	4. 10	4. 17	4. 18	4. 20	4. 13		4. 20
トラツグミ	4. 26	4. 20	5. 4	5. 1		4. 21	4. 21
アカハラ	4. 24	4. 30	5. 5	4. 30		4. 30	5. 5
ツグミ		10. 7			9. 25		
ヤブサメ	5. 7	4. 28		5. 14*	4. 24		
ウグイス	5. 4	4. 27		4. 27	5. 4		
メボソムシクイ	5. 29	6. 5	6. 12				
エゾムシクイ	5. 7	5. 6	5. 8	5. 1	5. 5	5. 7	5. 5
センダイムシクイ	5. 4	5. 2		5. 10	5. 7	5. 8	5. 5
キビタキ	5. 8	5. 13	5. 9	5. 14	5. 6	5. 14	
オオルリ	5. 2	5. 10	5. 9	5. 9		5. 14	5. 8
サメビタキ	5. 14	5. 16					
ホオジロ	4. 6	3. 21	4. 11	4. 8	4. 4		4. 8
カシラダカ	10. 9	10. 9	10. 16				
アオジ	4. 21	4. 16	4. 17	4. 16	4. 16		4. 16
クロジ	4. 21	5. 3			4. 26		
アトリ		10. 17	10. 13				
ベニマシコ	4. 14	4. 18	4. 18	4. 19	4. 11		4. 13
ニュウナイスズメ	5. 6	4. 25	4. 25	5. 1	5. 4		5. 8
コムクドリ	5. 14	5. 17					

＊は十勝三股での記録。それ以外はすべて糠平周辺での記録

〔文献〕

(1) 川辺百樹　1975、大雪山国立公園東部の鳥類．ひがし大雪博物館々報、第1号：12—19.

(2) 阿部　永　1975、大雪山の動物研究史．北海道自然保護協会会誌、第13号：17—21.

(3) 正富宏之　1976．鳥類調査．大雪山系自然生態系総合調査、中間報告（第2報）：195—222、北海道.

〒080-15　河東郡上士幌町字糠平

鵡川でオオチドリを観察

羽田恭子

日本鳥類目録第5版には、北海道の記録がないので発表します。

オオチドリ　1羽　54年8月23日　勇払郡鵡川

ムナグロのカウント中発見、ムナグロ96羽と、左脚を痛めたチュウシャクシギ1羽と行動を共にしていた。はじめ、川の対岸の乾いた砂地にいた。

この時は遠くて種名が判らず、ずっと観察を続け、ムナグロと一緒に飛んで牧場や砂地に下りた時は、30mくらいで見ることができた。

頭顔は大変白っぽく夏羽と思われ、胸と腹の境には黒線、胸は赤褐色にぼやけ、夏羽と冬羽の中間と思われる。脚は黄色で飛ぶと尾を超えた。ムナグロの中にいると、白っぽくよく目立った。

25日、26日、30日もムナグロは観察したが、オオチドリと脚を痛めたチュウシャクシギは見当らなかった。

〒064　札幌市中央区円山西町3—3—26

えぞ鳥獣夜話 －3－

―開拓使の保護施策―

安　田　鎮　雄

明治２年本道に開拓使が置かれた頃の公文書は、道庁の行政資料課に保存され一般の閲覧にも応じているが、当時の公文書を繰ってみると、驚くほど科学的な背景に基づいて行政施策を進めていたことがわかる。

明治14年開拓使と農商務省の照復文書の中に、狩猟の意義に触れた一文があり「規則の精神は無害鳥獣の生育をはかり、虫類のいまだ害性を呈せざるに先立ちこれを駆殺し、ひとえに動植物を保護するにあり、ひっきょうこれらの豊凶は民命の繋るところにして、施策上最も要用の点とす」と述べている。この精神は現在も鳥獣保護施策の根幹をなすもので、こうした欧米なみの思想がいち早く採り入れられたのは、お雇い外国人教師の提言があったことや、また開拓使みずからが、外国派遣の官員や留学生を通じて膨大な文献を取寄せ、ほん訳して施策に生かしたからであり、ぬるま湯的な現在の保護施策に比し、凌駕するとも劣るものではない。

益鳥にされたカラス

カラスは害鳥の代名詞のような鳥であるが、明治16年、ときの札幌県令の調所広文から中央政府への上申書に、カラスの保護を訴えた一文がある。カラスはそれまで害鳥として１羽４銭の捕獲手当まで出してきたが、バッタの天敵として益鳥の仲間入りをしたのである。

「カラスは其の性、虫類を好み、バッタ駆除に大功あるは、かつて駆除に従事せる者の皆実視するところなり。凡そ世間の事物は利害相伴うは自然の理にして、カラスの如きは其の害ありといえども、近年の如くバッタ族おびただしく繁殖する場合においては、其の功は遂にその害を償いて尚餘あり、駆除奨励を廃止すべし」との内容である。害鳥から罪一等を減じられて駆除対象からはずされた。スズメの絶滅を意図した中国が、害虫の発生に悩み、スズメの駆除を中止した話が伝えられているが、その先輩はなんと開拓使だったようである。

野鳥の人工養殖を計画

明治16年宮内省との往復文書を見ると、千葉県宮内省御猟場へ、サコを運んで人工養殖をし、放鳥を計画していたことがわかる。サコはエゾライチョウのことで本道特産である。たまたま道内視察の大山巌陸軍卿（後に元帥）が、猟鳥として適当なサコに注目、宮内省に申し入れたらしい。５人のベテランハンターで生捕り作戦を展開し、５日間で15羽の戦果。５個の輸送用の箱まで注文したが、飛行機を利用できる昨今と違って、輸送に手間どっている間にあえなくへい死、計画は挫折した。

反面、明治10年七飯勧業試験場から函館支庁への書信によると、青森県から日本キジを移入、本道での放鳥を計画した。「当道山野に繁殖せしむるお見込をもって、青森県より取寄相成キジ、オスメス５羽は、当場に飼養いたし繁殖したるときは大野村字向野の山野に放鳥すべきが可」と述べている。種キジは１羽１円81銭を青森県に支払っている。当時本道はキジの空白地帯であった。現在本道に繁殖しているコウライキジは昭和５年以降のものである。勧業試験場の努力も空しく、半年ほどの間に種鳥は全部死滅した。その成否はともかくとして、保護すべきものと、狩猟対象物を区別し、狩猟には人工繁殖のものを当てるべく考慮していたことに注目すべきである。

資源としての高度利用

明治の頃のシカの乱獲を、開拓使の責任の如く言う者もあるが、それは事実ではない。シカは豊富なだけに、かえって貴重な資源と見なし、その保護に腐心した。明治８年「鹿猟仮規則」を定め、一般の狩猟免許と区別、特別のシカ猟税を課し、免許人員を制限し、保護区まで設けた。しかし面積が広大で取締りが徹底せず、密猟者が横行し、また明治12年の豪雪による大量へい死が、シカの激減の引き金となった。資源としていかに貴重に扱ったかは、その利用の方法に現れている。皮や角は貴重な外貨を得、肉は燻製や寒干に、後には缶詰工場も設けた。内臓や血液からは人造硝石を産し、鹿油は石ケンの原料に、骨灰は肥料とした。明治８年浦河支庁の文書を見ると脳みそまで買い集めている。

当時野生動物の肉は貴重な蛋白源で、明治10年の外事関係文書には、外人の接待に用いた献立表がある。鹿肉ロースと洋酒の蒸煮、白鳥のロースとハム、鴨肉の蒸煮などである。最後に食べる話で恐縮だが、遊戯として射殺する傾向の強い近代狩猟からみて、これだけ大切に資源扱いをされるなら、殺される彼等も人間に文句をいうまいと思うが……。（おわり）

〒061-01 札幌市豊平区東月寒219―68

マナヅル発見

大西重利

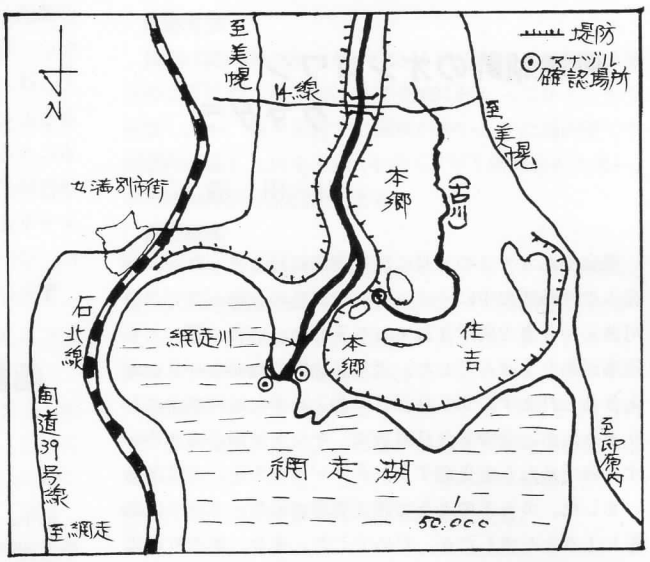
昭和53年10月、網走湖畔の網走川デルタ地帯でマナヅルを発見しましたのでその概要についてお知らせいたします。

◆**日時**　昭和53年10月19日

◆**場所**　女満別町本郷・住吉両地区の網走湖畔の網走川デルタ地帯

◆**発見場所の概況**　網走湖の東岸には国鉄石北線沿い約6kmに渡って原生林があり、湿性植物の大群落は天然記念物となっておりその主役はミズバショウ、樹木は高さが30m程もあるカツラ、ヤチダモ、センノキ、ヤチハンノキ、カシワ、ニレなどで、太さが 40〜120cmの大木まである。その面積は約150haで、そのうち女満別寄りの20haの原生林の中にアオサギの巣が約400余個ある。私が昭和22年4月に発見した当時はわずか40〜50ケに過ぎなかったことから、繁殖地としては好条件の所である。附近には大小の湖が7つ、他に小沼が散在し水田もあり幼鳥達はここで育つ。この地区は昔から全国でも有名な鴨の猟場で、それだけに鳥の種類も豊富な所で昭和4年8月、山階鳥類研究所理事長夫妻が女満別に鳥の調査に来られた時も田中氏の父親、故千松氏が1日モーターボートで案内した所です。

発見場所の概況



◆**発見までの経過**　知人の田中良平氏が9月29日にこの地区を見廻ったときに、網走川の本流の土砂が湖の中に突出した中州のガマ原から1羽の大型の鳥が飛び立つのを見たが、羽色がアオサギと幾分違っているなと思った程度で特に気にも留めないで帰宅している。

10月1日　私をはじめ幾人かの人達がタンチョウに似た鳥が飛び去るのを観察している。

10月4日　知人の旭　政雄氏も旧河の本流の水留でツルを確認する。種名は未だに不明である。

10月19日　前日に田中氏からどうも普通のツルのようでないので、種類を確認してくれるよう依頼があった。そこで田中氏とともに観察に出かける。観察には望遠レンズを付けたカメラ3台を用意し、雨模様なので魚つり用のクーラーに入れ、アルミ製の平べったい絶対に転覆しない船を用意し、船外機を取付けて10時20分頃出発。北風、曇、小雨も降りはじめ向い風に悩まされ、船は左右にローリングし難航しながら本流に入る。出来るだけ接近するためガマやヨシの蔭を通る。約120〜130mまで近づいたが逆光線、そのうえ悪天候でうまく写るかどうかわからないので写生をする。その特徴は、①眼のふちが赤い　②頭部と首の後が白色羽毛　③脚が赤い　④嘴は白いようである　⑤からだはタンチョウより少し小さいようである　⑥からだ全体はアオサギのようである　⑦飛んだときに分ったが翼の先の方が黒く見える　以上であった。

写生のあと撮影にはいり、400ミリを特殊装置の台に取り付け肩がけしてケーブルレリーズを押すが緊張しすぎてシャッター音がおかしい。2人でちょっとだけ顔を出して写真をとるのだが、それでも人の気配を感じ逃げ腰になる。この間25分、とうとう網走川の支流の方へ飛び去った。すぐ船に帰り支流の中州の所へ行って見ると足跡はあるが姿はなく牧場の方向に逃げたらしい。船酔いを起しながら田中氏宅に帰りすぐに図鑑で調べたところマナヅルであることが分った。北海道では明治4年に千歳で発見されて以来の実に104年ぶりの発見であることも分った。

その後11月3日、旭氏からツルがいるとの情報がはいり探しに出かけたが遂に発見できなかった。11月20日頃まで調べたがその後、当地方での情報はなく、1月下旬NHKのラジオで福井県でマナヅル1羽を発見したとの放送を聞いたのが最後だった。この件については山階鳥類研究所にも報告した。

〒093 網走市駒場25—13

さえずり

阿寒湖畔のオジロワシ・クマゲラ

山　田　清　二

機会があってこの８月に阿寒湖畔に行きましたが、観光みやげ品店の中にオジロワシの成鳥の剝製が非売品許可済という事で展示されておりました。店員に聞いても返事がありませんでした。天然記念物の鳥がなぜ？と考えさせられます。又８月26日の朝７時半に雄阿寒岳に登りましたが、途中２合目附近で、キツツキ類の鳴き声がするのであたりを見廻すと、クマゲラの大きいのに出会いました。カラスのようで頭が真赤でした。８ミリに撮影しようとしましたが、だめでした。また、あたりの木々には、キツツキのあけた大きな穴があり驚きました。

阿寒湖とは天然記念物の宝庫だと考えさせられました。　〒047-01　小樽市朝里１―３―17

カナダヅルを確認

羽　田　恭　子

観察場所　ウトナイ湖　　観察者　羽田恭子

日時　昭和54年11月16日　12時頃

11月18日の探鳥会の下見のつもりで出かけ、対岸でオジロワシが飛んだのでみると、アオサギが一斉に舞い上った。これは、たぶん越冬する個体と思い、カウントすると（11羽）その中に、首を伸ばして飛んでいるツル型の鳥がいた。プロミナーに入れても、曇天と遠方のため色が判らず、トキサタマップの方へ着地するのを確認して、そこまで行ってみると、カナダヅルであることが判った。11羽の群れは、アオサギ10とカナダヅル１であった。

一緒に飛んでいると、アオサギは首をＳ字型にし、カナダヅルは伸ばしているためか、大きさは、ほとんど同じに見えた。順光ではアオサギの方が、風切羽と雨覆羽の濃淡がはっきりし、カナダヅルの方が、濃淡の差が少ない。順光では、カナダヅルの顔は白く、逆光では体色と、ほとんど同じに見えた。頭頂の深赤色は、正面からみるとハート型にみえる。脚、嘴は黒。脚が半分くらい水に入る浅い処で、採餌をしていた。体色は濃灰色で、褐色味がないため、成鳥と思われる。16日と20日は、アオサギと行動を共にし、17日はオオハクチョウの群れに、ついていた。表紙写真を御覧ください。

〒064　札幌市中央区円山西町３―３―26

函館湾のコクガン

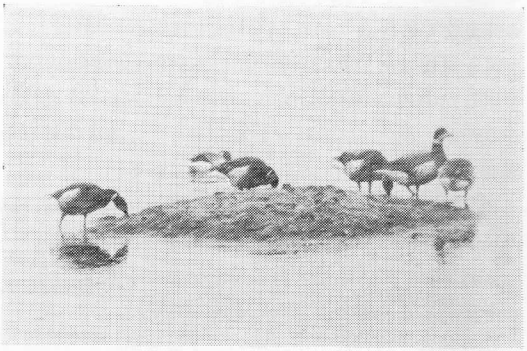
長　尾　　康

毎年、11月初旬から４月下旬まで、コクガンが函館湾の上磯町茂辺地海岸付近に飛来し、越冬します。

昨年のガンカモ類調査では95羽が確認され、今までの最高の記録でした。

この写真は昭和54年１月16日の朝６時半ごろに撮ったもので、ちょっと吹雪いている中でした。

〒041　函館市中道町30番２号　窓明寮



鵡　　川

54.9.24　9：30～14：30

岩泉ゆう子

９月の鵡川は空も雲も草原もすっかり秋の色合いを濃くしていました。幸い、風は穏かで暖かな天候でしたので今日はどんな鳥たちに出会えるのだろう、覚えたばかりのシロチドリやホウロクシギは姿を見せてくれるかしらと期待しながら河口に向いました。

牧場に入るとすぐ、カワラヒワ、ムクドリの群れ、途中の水辺でダイゼン、ツルシギを見た後、河口近くの干潟まで進

みました。ずっと向こうではウミネコやカモメの仲間が飛び交い、手前の草むらの中にはカモの頭が見え隠れしています。そして干潟ではシギやチドリがそれぞれ思い思いの恰好で採餌したり羽を休めたりしています。プロミナーを通して、のぞかせてもらった鳥たちの世界は興味つきないものでした。メダイチドリはゴカイを引張っては引張り切れずに何度も挑戦していますし、アオアシシギはあの華奢な身体には不釣合と思われるぐらい大きな魚をグッグッと飲みこみけろりとして、またせわしなく餌を捜し始めます。ツルシギもハマシギも絶え間なく動いています。すると突然一斉に飛び立ちました。オオタカが現れ、それは若鳥らしいのですが流木の上に悠然としたスタイルでこちらへ顔を向けました。

昼食を終え、空がいくぶん曇り始めて来た頃、「ガンだよ、ガンが飛んで来ますよ」と教えられ指さされた方を見ると大きなガンが飛んで来ます。くちばしの黄色が見える程の近い空を19羽のヒシクイが飛んでいます。ほんの短い間にも文字通り桿になり鉤になり飛んで行きました。それは心の奥底まで強く激しく揺さぶられるものでした。ミサゴ、チュウヒ、オオタカ、ハヤブサといったワシタカの仲間が揃って顔を見せてくれたり、普段はあまりいないコオバシギ、サルハマシギ、ヘラシギを見ることが出来たのもこの日の特徴でした。立ち去り難い気持で干潟を後にしましたがヒシクイを見たときの衝撃は今も心から消えずにあります。それは或る種の哀しみのようなものかもしれないと思うのです。

〔記録された鳥〕 アオサギ ヒシクイ マガモ カルガモ コガモ ヒドリガモ オナガガモ ミサゴ トビ オオタカ チュウヒ ハヤブサ メダイチドリ ムナグロ ダイゼン トウネン ハマシギ サルハマシギ コオバシギ ミユビシギ ヘラシギ ツルシギ アオアシシギ オグロシギ オオソリハシシギ チュウシャクシギ タシギ ユリカモメ オオセグロカモメ ウミネコ アジサシ ヒバリ ショウドウツバメ ハクセキレイ ノビタキ メボソムシクイ ホオアカ オオジュリン カワラヒワ スズメ ムクドリ ハシボソガラス 42種

〔参加者〕 武田忠義 小杉山哉史 三河登久 羽田恭子 柳沢信雄・千代子 長谷川美幸・涼子 山本 一 清水幸・朋子・克幸・亜樹子 鈴木武雄 梅木賢俊 鷲田善幸 早瀬広司・富 清野久子 岩泉ゆう子 島田明英

〔担当幹事〕 梅木賢俊 早瀬広司 21名

〒062 札幌市豊平区旭町3丁目3—31

野　幌

54. 10. 28　8：40〜13：10

扇谷信幸

吹く風の冷たさに、冬の近さを感じさせる日であったが、良い勉強になった。

道立図書館前での説明の後、歩き出すとすぐに鳥を見つけた人から声がかかり、あわてて双眼鏡を取り出す。大沢口の近くでトビとノスリが舞っているのが見られた。恥ずかしい話しだが、私はこの時初めて、両者の区別を知った。アオジが傍の草陰から飛び出すや否や、その名を言う人があり、友人と二人、感心させられることしきり。

大沢口から入ってすぐ、ヤマガラ、ハシブトガラ、シジュウカラなどの群れに出会う。メジロ、ゴジュウカラも混っているのが見られる。初心者の私であるが、シジュウカラやヒヨドリなどは、冬になると庭にやって来るのでよくわかるのがまた楽しい。ウグイスが、時ならぬさえずりをしていた。今年生まれた鳥だという説明であったが、そういえば素人といった鳴き方で、みなさんの笑いをさそっていた。「来年の春まで生きていてくれればいいが」という思いにさせられた場面であった。他にはエゾリスのおすましや、ヤマゲラ、コゲラ、カワラヒワ、アカゲラなどを見ることが出来た。特に、ヤマゲラの青さは印象的だった。大沢園地で昼食となる。

時おり顔をのぞかせてくれる陽の光があたたかい中を昼食後は、キクイタダキ、エゾビタキなどを見る。先日の台風20号で、クマゲラの営巣跡のある木が倒れていた。いつもは、原始林の中は風が弱いという話であったのだが、残念なことだ。

酪農学園大に通学していて、原始林にも何度か入ったのだが、今回が一番収穫が多かったようだ。本当に充実した一日でした。ありがとうございました。

〔記録された鳥〕 トビ ノスリ キジバト ヤマゲラ アカゲラ コゲラ ヒヨドリ ミソサザイ ルリビタキ ツグミ ウグイス キクイタダキ エゾビタキ エナガ ハシブトガラ ヒガラ ヤマガラ ゴジュウカラ メジロ カシラダカ アオジ カワラヒワ ベニマシコ スズメ ムクドリ カケス ハシボソガラス 27種

〔参加者〕 飯塚憲滋 屋代育夫 鈴木 勇 扇谷信幸 横田 修 長谷川涼子 藤沢忠勝・明子・伸也・宏樹・尚子 黒田聖子 関口秀樹 中島元己 渡辺紀久雄 野地俊郎 深村康雄 羽田恭子 早瀬宏司・富 清水朋子・克幸 岩泉ゆう子 柳沢信雄・千代子 野口正男 萩 千賀

〔担当幹事〕 野口正男 早瀬広司 27名

〒047 小樽市新光2—24—24

ウトナイ

54. 11. 18　10：00〜11：30

村田信義

家（苫小牧）を出る頃に降り始めた小雪が、ウトナイ

遊園地に着いた時は、本格的な降り方に変っていました。胆振地方では、今冬初めての積雪となり、前日までの晩秋の風情は全くありません。このため予定のコースを途中で切り上げ、1時間余の短い探鳥会となりました。記録的に少ない鳥合わせ数もこのためです。

順を追って報告してみます。遊園地の食堂前に集合。担当幹事の羽田さんから、一般説明とカナダヅル発見の説明がありました。これは別に紹介されると思いますので、省略しますが、本日の探鳥会の目玉商品。この日の朝刊に載ったばかりのニュースを、発見者本人から、報告していただき大変ラッキーでした。悪天候のため、この日はツルに会えませんでしたが、お話しだけで満足しました。

観察できた鳥は、遊園地前ではコブハクチョウの家族と、羽を傷つけたオオハクチョウ1羽。コブハクチョウは陸に上がり、見学に来た人の車の窓から、直接餌をもらい、遊園地専属のペットになっているようです。

次に南西方面の先端へ移動し、対岸のアオサギ、カモメ、ツルシギ、タゲリ等の群れを観察。望遠鏡の中で、雪のため今にも消えそうにたたずむアオサギの姿は、冬ならではの光景です。

次にユースホステルへ向いましたが、雪が激しくなり、小川の所から戻ることにしました。晴れていれば、美しい金属光沢のカモ類が、沢山みれたのに残念でした。

〔記録された鳥〕　アオサギ（コブハクチョウ）　オオハクチョウ　マガモ　カルガモ　コガモ　ヒドリガモ　スズガモ　タゲリ　ツルシギ　カモメ　シジュウカラ　ホオジロ　スズメ　ハシボソガラス　15種

〔参加者〕　寺江政雄　笹川幸子・利恵子　叶野駒夫　高安康祐・祐美・美智子　藤沢伸也・ヒロキ　吉岡義明　村田信義・幸子・謙子　黒田聖子　佐藤栄邦　野地俊郎　長谷川涼子　羽田恭子　野村梧郎　岡崎豊治・有治　佐藤　佐　日下恒雄　新井博子　村瀬克子　岩泉ゆう子　曾根モト　谷口登志　若山　智　北尾　諭　深村康雄　渡辺紀久雄　早瀬広司　鈴木　勇　梅木賢俊　野々村　菊　三河登久　柳沢千代子　野口正男　萩千賀　40名

〔担当幹事〕　柳沢千代子　羽田恭子

〒053 苫小牧市糸井149—131

昭和55年4月までの予定です。防寒には十分気をつけてお出かけ下さい。特に足元を暖かに

＜野幌森林公園＞

◆とき　昭和55年2月24日(日)　午前9時・4月27日(日)　午前8時半

◆集合　国鉄大麻駅待合室

2月は歩行に適したスキーが必要です。ウソ、マヒワ、レンジャク等冬鳥の観察。

4月は、木の葉も繁らず見やすい時です。アオジ、ウグイス、センダイムシクイ等、夏鳥の観察

＜ウトナイ湖＞

◆とき　昭和55年3月30日(日)　午前10時

◆集合　ウトナイ遊園地（中央バス、ウトナイ下車）

北帰途中のガン・カモ・ハクチョウやオジロワシ等

＜野幌森林公園を歩きましょう＞

上記のほか、昭和55年4月20日（日）午前8時半、大麻駅待合室集合で、探鳥散歩を行います。どうぞご参加下さい。

☆　いずれの探鳥会も、昼食、筆記用具、観察用具等ご持参下さい。

☆　探鳥会についてのお問い合わせは

柳沢 851—6364 か 羽田 611—0063 へ

★ 新年懇談会ご案内 ★

例年の通り下記要領で新年懇談会を行います。お誘い合わせの上、多数ご参加下さい。

◆と　き　昭和55年2月2日（土）13：30〜16：30

◆ところ　札幌市中央区北1条西7丁目

「北海道婦人文化会館」（電話 251—6349）

◎内　容　会員の写真やスライド発表、観察報告、懇話などを予定しています。

〔編〕〔集〕〔後〕〔記〕

今号の発行日は12月21日ですが、第1回の編集会議を開催したのが11月下旬だったため、発行日に間に合わせようと大急ぎで割付を行い印刷業者に発注したのが、12月11日でした。このためスペース配分がうまく行かず、ちょっと見ずらいところがあろうかと思いますが御勘弁下さい。なお、冬鳥などの珍らしい記録、その他面白い記事などありましたら気軽にお手紙下さい。（白沢記）

〒 060　札幌市中央区北1条西7丁目　広井ビル5階　北海道自然保護協会気付
電　話　(011) 251—5465番　　郵便振替　小樽18287